

最強登山家 プルジャ - 不可能を可能にした男 - (ニルマル・プルジャ 著 西山志緒 訳)

著者紹介

ニルマル・プルジャ

2019年、8000メートル級14座を7ヶ月で踏破すると宣言、みごと成し遂げた登山家。1983年ネパールの貧しい家庭に生まれる。長兄、次兄を追いかけて切磋琢磨し、グルカ兵となる。英国に移り、英国舟艇部隊に所属。2018年、大英帝国勲章をエリザベス2世から授与。アフガニスタン戦闘経験者。「願えばかなう」をスローガンに、祖国ネパールのシェルパたちの地位向上を掲げ、SNSなどを積極的に取り入れた型破りな登攀スタイルで世界中にインパクトを示し続けている。

西山 志緒（にしやま しお）

山登りをこよなく愛する翻訳家。好きな山は燕岳、仙丈ヶ岳、陣馬山。主な訳書に「プロバンス邸の殺人」「ボルグとマッケンロー」（いずれも、ハーバーコリンズ・ジャパン）など。佐藤志緒名義でも訳書多数。＜著書カバーより＞

山の本も毎月新刊が出版される。今回はその中でもひととき強烈なタイトルが目立った本を紹介したい。といっても私だけかもしれないが。その名は「最強登山家 プルジャ」しかも副題が「一不可能を可能にした男」である。どんな不可能の状況なのか そしてその状況を可能にできる人物とは何者なのかと興味が沸き立つ。

最初に本を開くと 8000メートル級のナンガ・パルバットの急斜面を転げ落ちるプルジャの滑落死にもなりそうな究極な状況に出会う。ステップを進めたときビビった様子の他の登山家から「固定ロープから手を離せ」と叫ばれ、言われたとおりにした。そのとき足下の雪が突然崩れ落ち、転げ落ち始めた。30、40メートル落ち続けどんどん増していく落下速度、そのとき、岩場に見えた固定ロープ。それをなんとしてもつかまなければと体をよじり、腕を精一杯伸ばし・・・つかんだ。手のひらが焼けるように熱い。だが死んでも放すものか。どうにか落下は止まった。

プルジャが自分に果たした二つのルールがある。一つ目は「どんな場合も希望を捨てるな」二つ目は「巨大な山では些細なことほどおろそかにするな」 この一つ目のルールを頼りに一命をとり止めたことになる。そしてプルジャは「滑落中、俺はほんの数秒でも死を恐れたか？まさか。『臆病者になるくらいなら死んだ方がまし』という精神を片時も忘れたことがない。」と言い張る。

プルジャは自らの肉体的な限界に望みたいという希望があり、2018年、「世界記録更新を目指して世界最高峰14座を制覇する」という目標を発表した。それまでの世界記録は2013年にキム・チャンホ（韓国）が達成した7年10ヶ月6日。その記録をなんと7ヶ月に短縮するのが目標。驚異的な目標で当初誰も信じなかった。冒頭の滑落場面もその目標のまさに途中の出来事である。14座の中には1座1座困難な状況は数知れない。しかし「今日は死なない」という強い信念で突き進んでいく。「人がありえないと思うことも、俺にとってはありえることなんだ」と。

「一度口にした約束を無視して手を抜いても気分が落ち込むだけだ。私はそんなふうには生きていたくない。あなたも、そうあるべきだ。」とプルジャは語る。（いの）

最強登山家 プルジャ 一不可能を可能にした男― 2024年12月18日発行 集英社 2700円